

阿蘇山の火山活動解説資料（令和8年7月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

阿蘇山では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は700～1,600トンとやや多い状態で経過しました。また、GNSS連続観測では、2026年5月頃から、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する変動が認められます。なお、火山性微動の振幅は概ね小さな状態で推移しています。

火山活動が高まった状態で経過しています。中岳第一火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和8年6月21日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図2、図5-②～④、図6）

火山性微動の振幅は、今期間は概ね小さな状態で推移しましたが、25日14時頃には中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が2.0 μ m/s程度と、一時的に振幅がやや大きな状態になりました。また、9日15時40分頃には、長周期の震動を伴う振幅の大きな火山性微動を観測しました。

火山性地震の月回数は4,001回（6月：2,366回）と、多い状態でした。孤立型微動は5,374回と前月（6月：3,266回）と比べて増加し、やや多い状態でした。2025年1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ0km付近に分布しました。

・火山ガスの状況（図5-⑤）

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり700～1,600トン（6月：500～1,700トン）とやや多い状態で経過しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

今回の火山活動解説資料（令和8年8月分）は令和8年9月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・噴煙など表面現象の状況（図3、図4、図5-①⑥⑧）

中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上900m（6月：900m）まで上がりました。今期間、監視カメラにより南側火口壁の赤熱は認められませんでした。

7月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（6月：約7割）と同程度でした。湯だまり内の北西側で高さ数m程度の小規模な土砂噴出を確認しました。噴湯は認められませんでした。赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は73℃と前月（6月：74℃）と同程度でした。南側火口壁の最高温度は347℃と前月（6月：403℃）と比べて低くなっており、高温の領域に変化はありませんでした。

・地殻変動の状況（図7、図8）

GNSS 連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

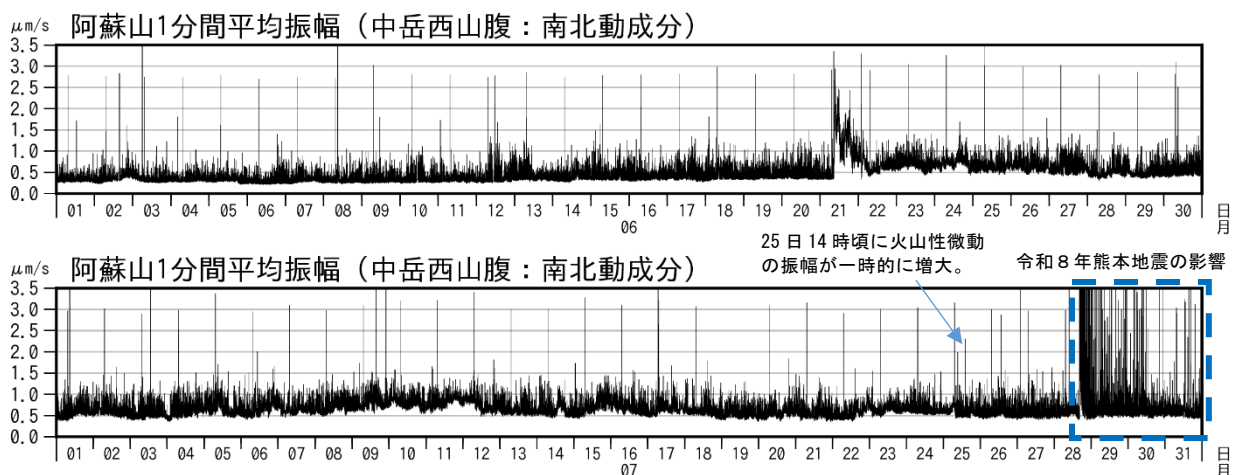


図1 阿蘇山 火山性微動 1 分間平均振幅（中岳西山腹観測点南北動成分、2026 年 6 月 1 日～2026 年 7 月 31 日）

火山性微動の振幅は、6月21日から22日にかけて増大しやや大きな状態となりましたが、その後は概ね小さな状態で経過しています。25日14時頃に一時的に大きな状態となりました。表面現象に特段の変化は認められていません。

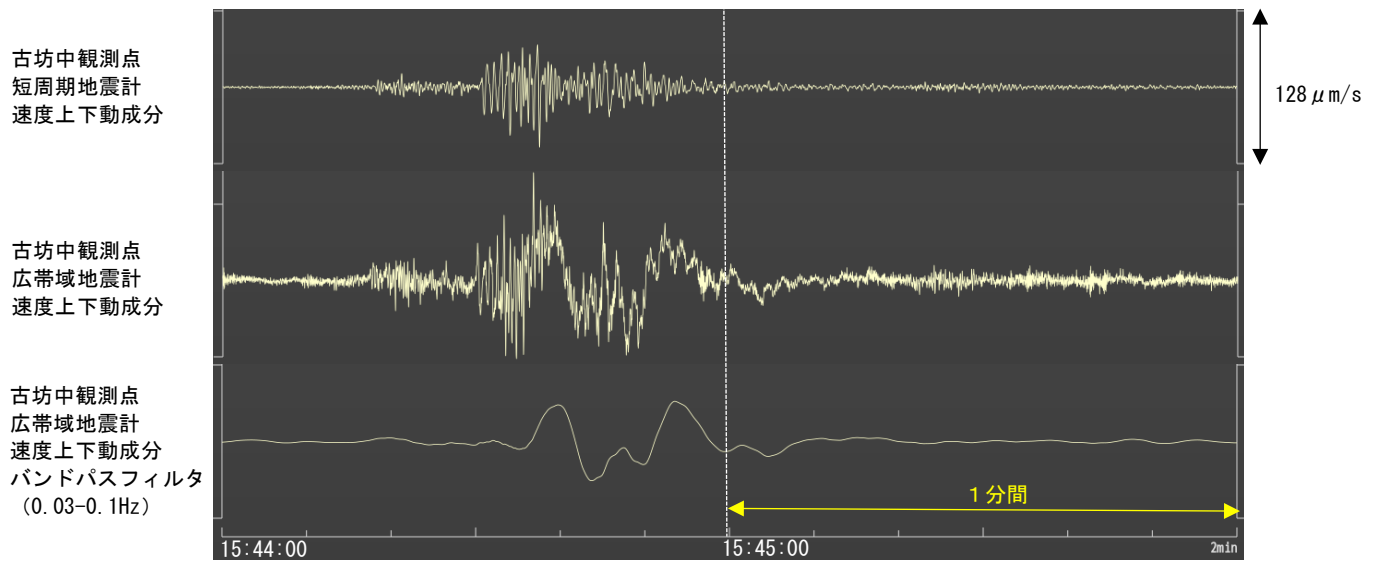


図2 阿蘇山 9日15時40分頃に観測された、長周期の震動を伴う振幅の大きな火山性微動の波形（古坊中観測点、上：短周期地震計上下動成分、中：広帯域地震計上下動成分、下：広帯域速度計上下動成分（バンドパスフィルタ0.03-0.1Hz））

9日15時40分頃に長周期の振動を伴う振幅の大きな火山性微動を観測しました。この時、表面現象には特段の変化は認められていません。



図3 阿蘇山 中岳第一火口の噴煙の状況（7月9日、草千里監視カメラ）

白色の噴煙が最高で火口縁上900m（6月：900m）まで上がりました。今期間、南側火口壁の赤熱は認められませんでした。

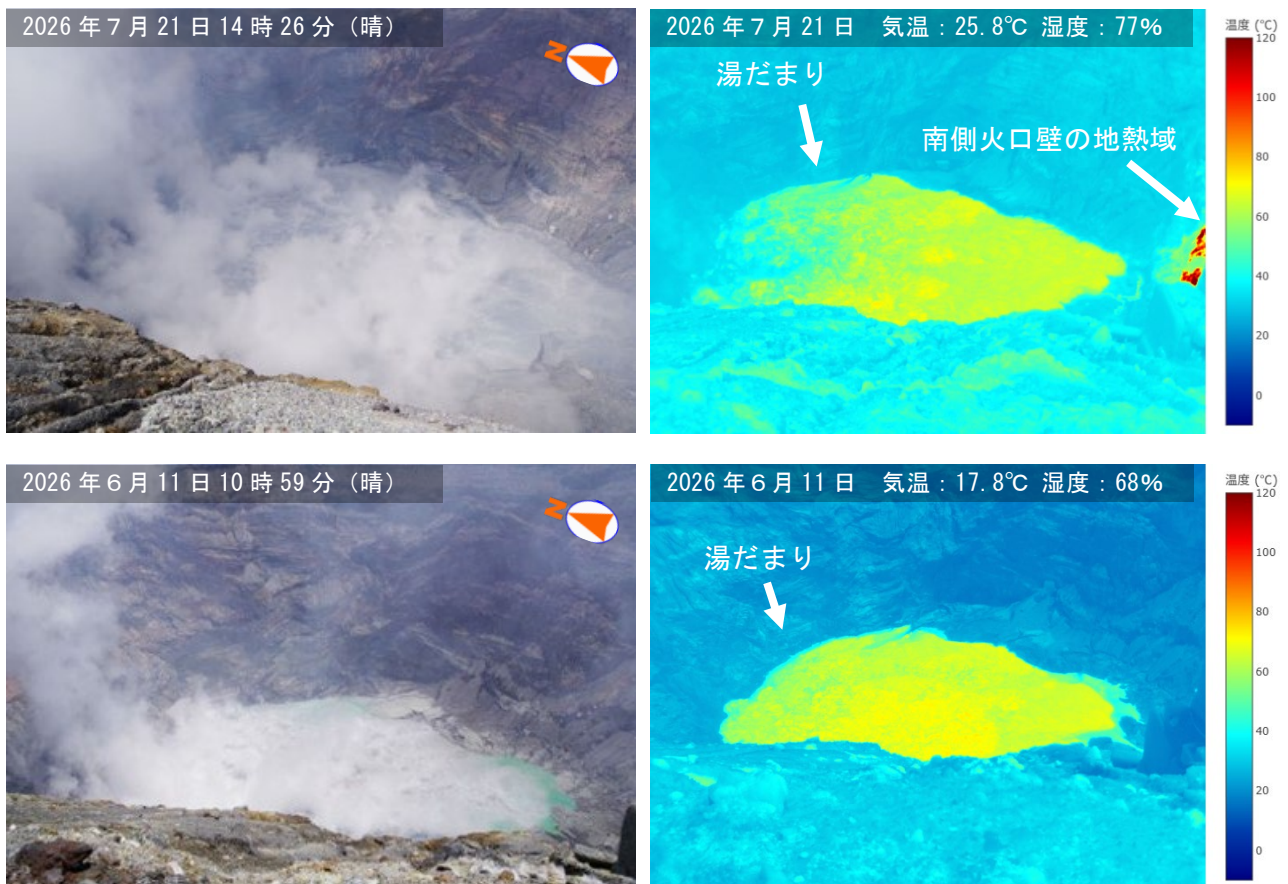


図 4-1 阿蘇山 中岳第一火口底の状況

（火口南西側観測定点から撮影 上図：7月21日、下図：6月11日）

- ・ 7月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（6月：約7割）と同程度でした。
- ・ 湯だまり内の北西側で高さ数m程度の小規模な土砂噴出を確認しました。噴湯は認められませんでした。
- ・ 赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は73℃と前月（6月：74℃）と同程度でした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、7月21日は14時14分～19分、6月11日は11時01分～06分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。

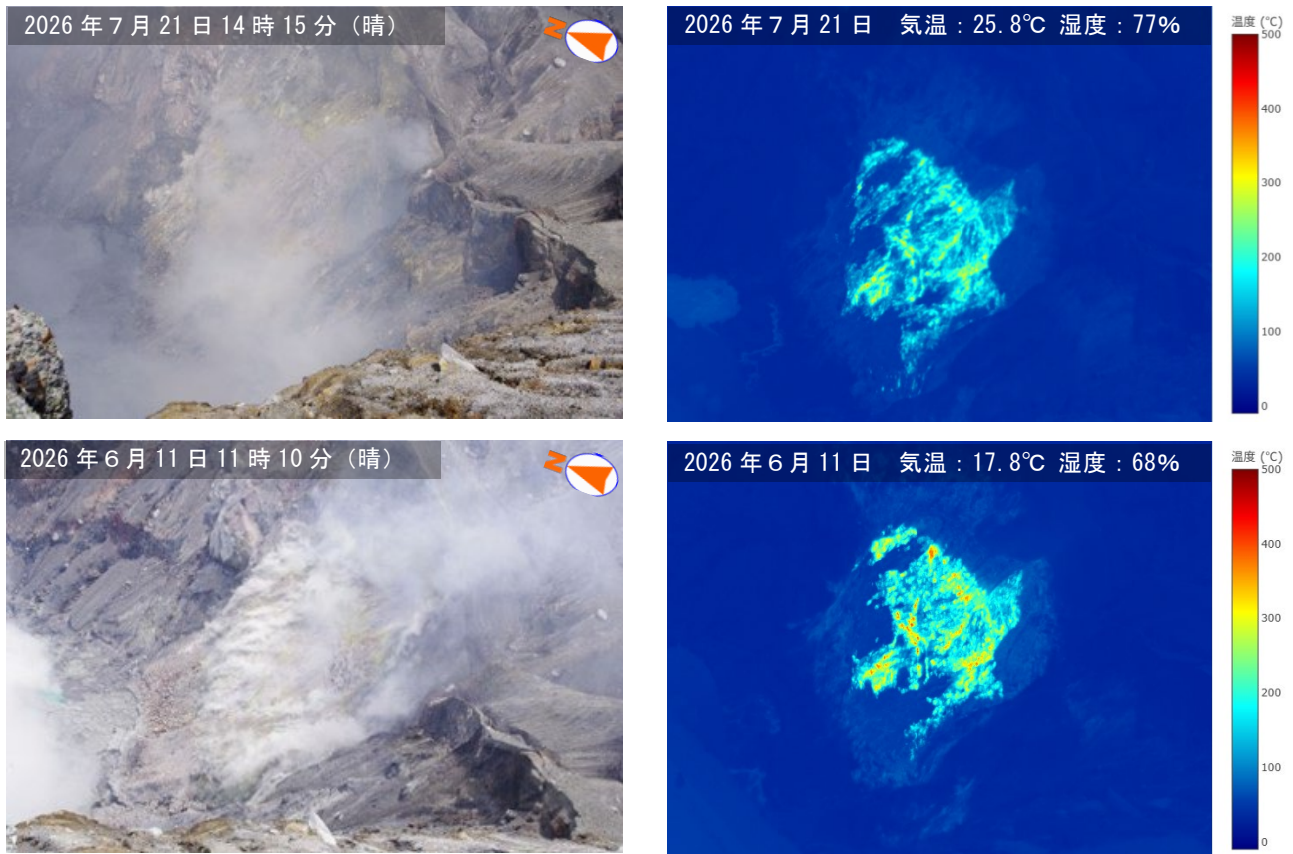


図 4-2 阿蘇山 中岳第一火口 南側火口壁の状況
(火口南西側観測定点から撮影 上図：7月21日、下図：6月11日)

21日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で、南側火口壁の最高温度は347℃と前月（6月：403℃）と比べて低くなっていました。高温の領域の状況に大きな変化は認められませんでした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、7月21日は14時24分～29分、6月11日は11時26分～31分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。



図 4-3 阿蘇山 現地調査観測位置図（観測位置及び撮影方向）

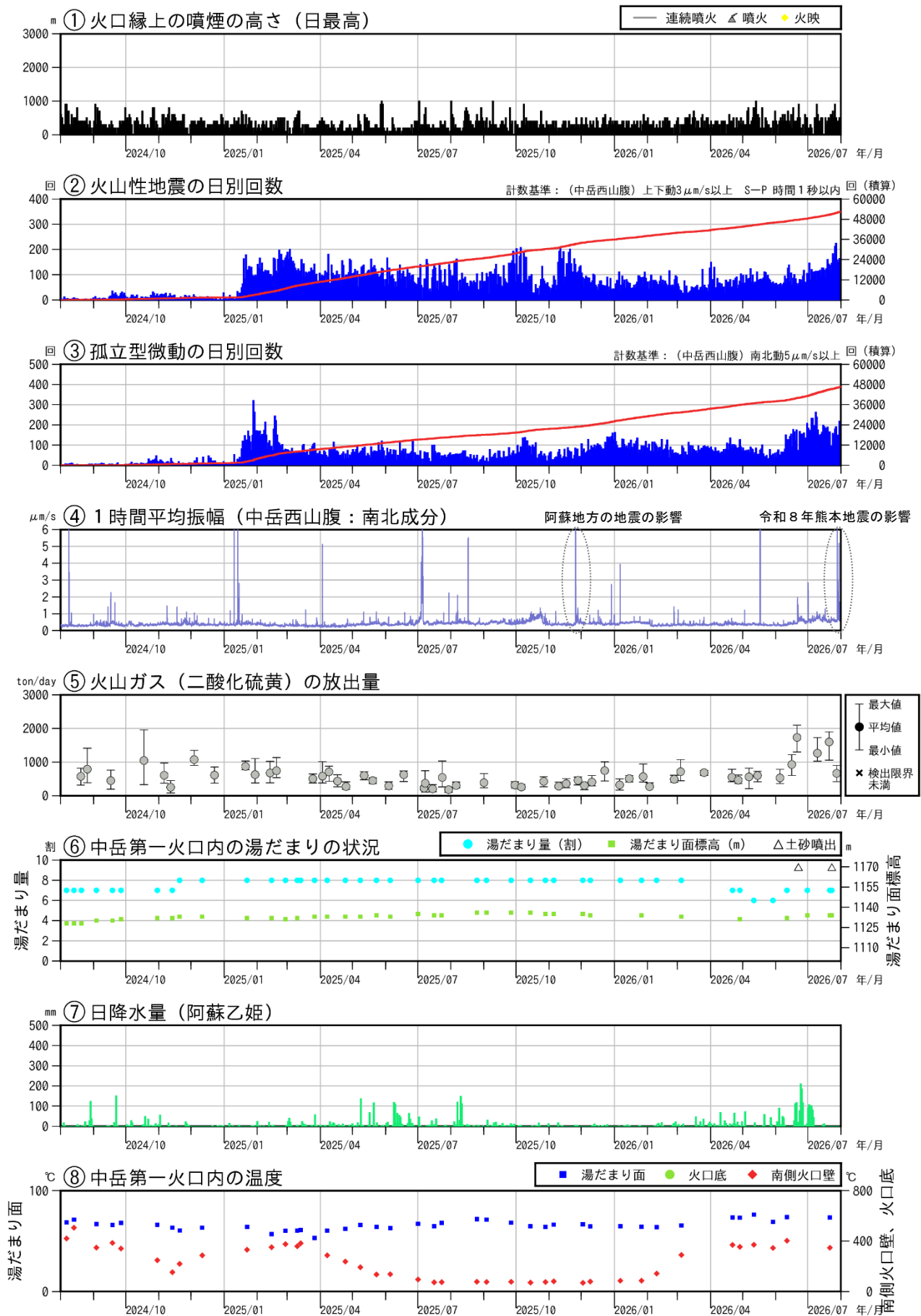


図5 （前ページ）阿蘇山 火山活動経過図（2024年8月～2026年7月）

< 7月の状況 >

- ・中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上900m（6月：900m）まで上がりました。
- ・火山性地震の月回数は4,001回（6月：2,366回）と、多い状態でした。孤立型微動は5,374回と前月（6月：3,266回）と比べて増加し、やや多い状態でした。2025年1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。
- ・火山性微動の振幅は概ね小さな状態で経過しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり700～1,600トン（6月：500～1,700トン）とやや多い状態で経過しました。
- ・7月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（6月：約7割）と同程度でした。湯だまり面の最高温度は73℃と前月（6月：74℃）と同程度でした。
- ・南側火口壁の最高温度は347℃と、前月（6月：403℃）と比べて低くなっていました。

赤線は火山性地震や孤立型微動の回数の積算（右軸）を示します。

⑤、⑥及び⑧は現地調査の結果を示しています。

⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口から北西約8km）の観測値です。

⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示します。

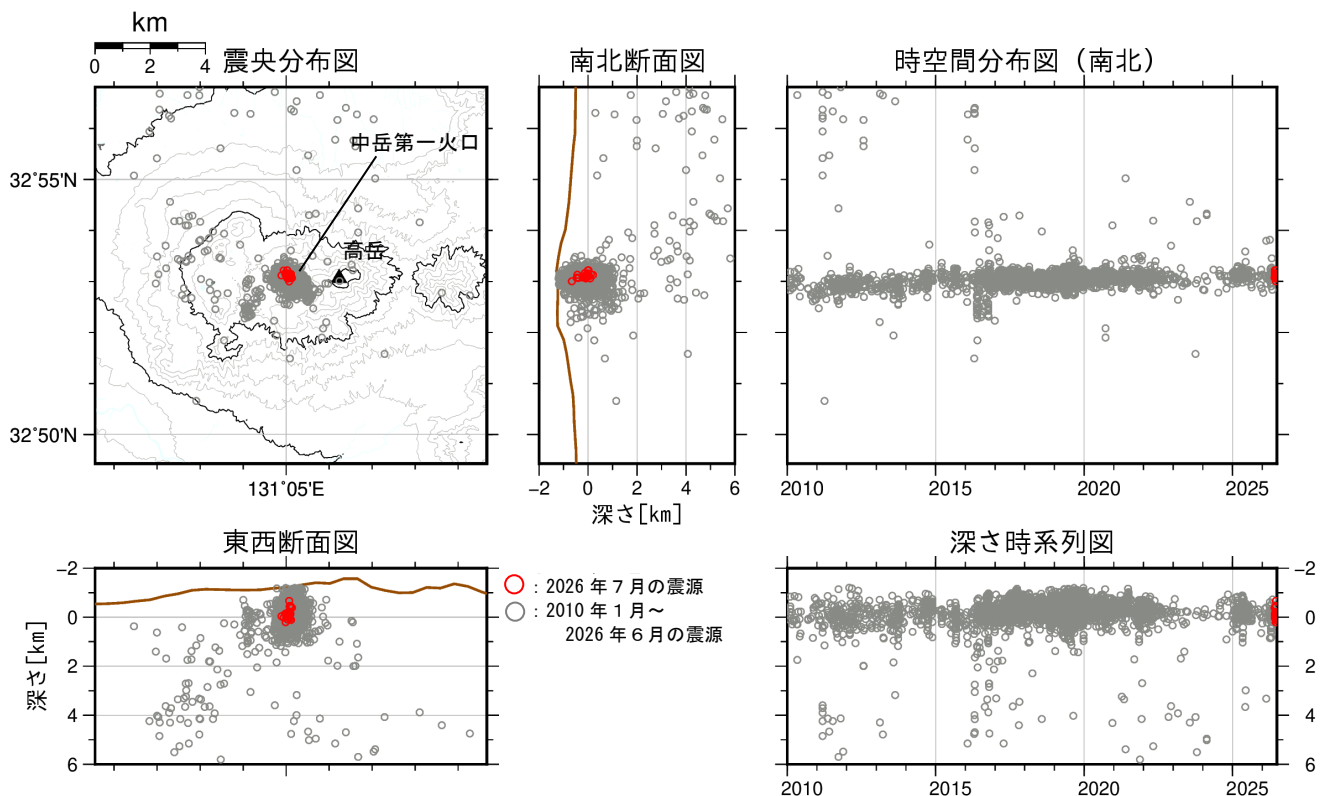


図6 阿蘇山 火山性地震の震源分布

< 7月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ0km付近に分布しました。

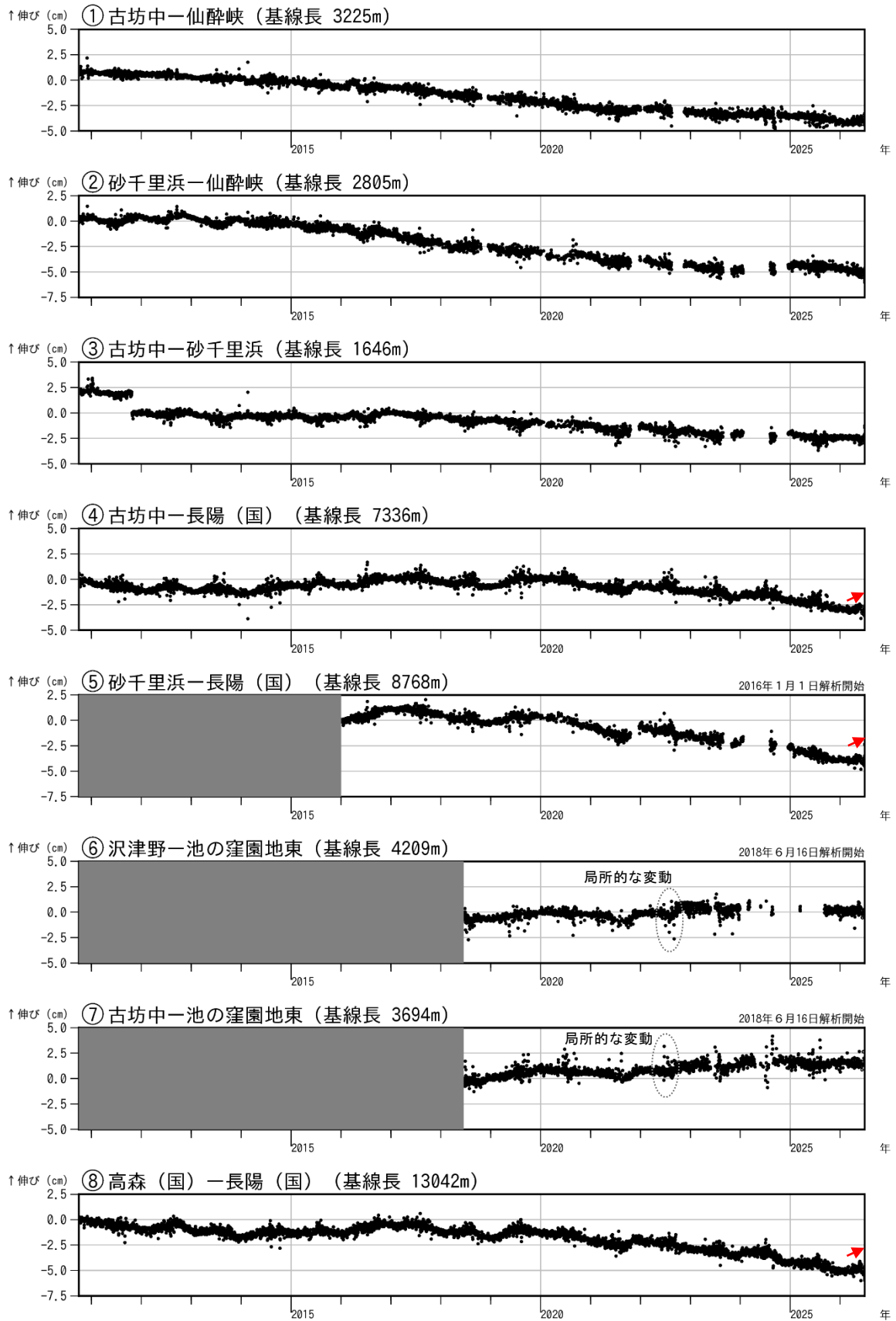


図7（前ページ） 阿蘇山 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2026年7月）

GNSS 連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線（④、⑤）及び広域の基線（⑧）において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

これらの基線は図8の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（国）：国土地理院

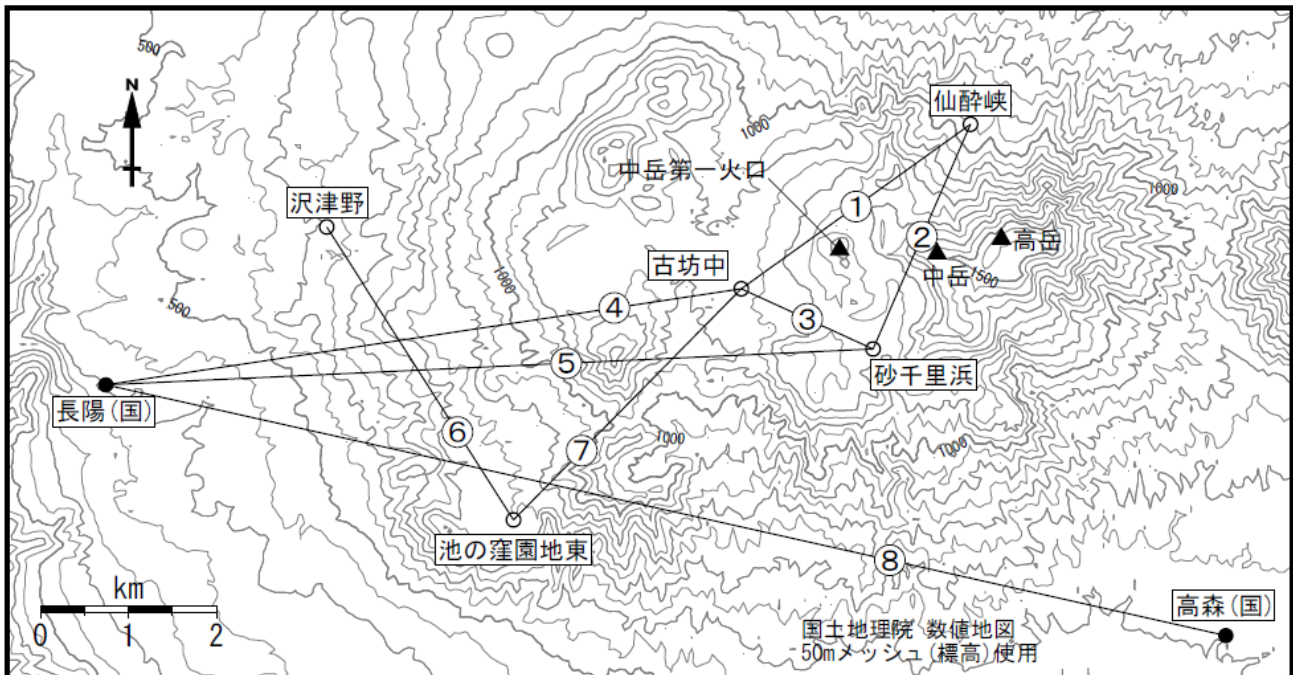


図8 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院

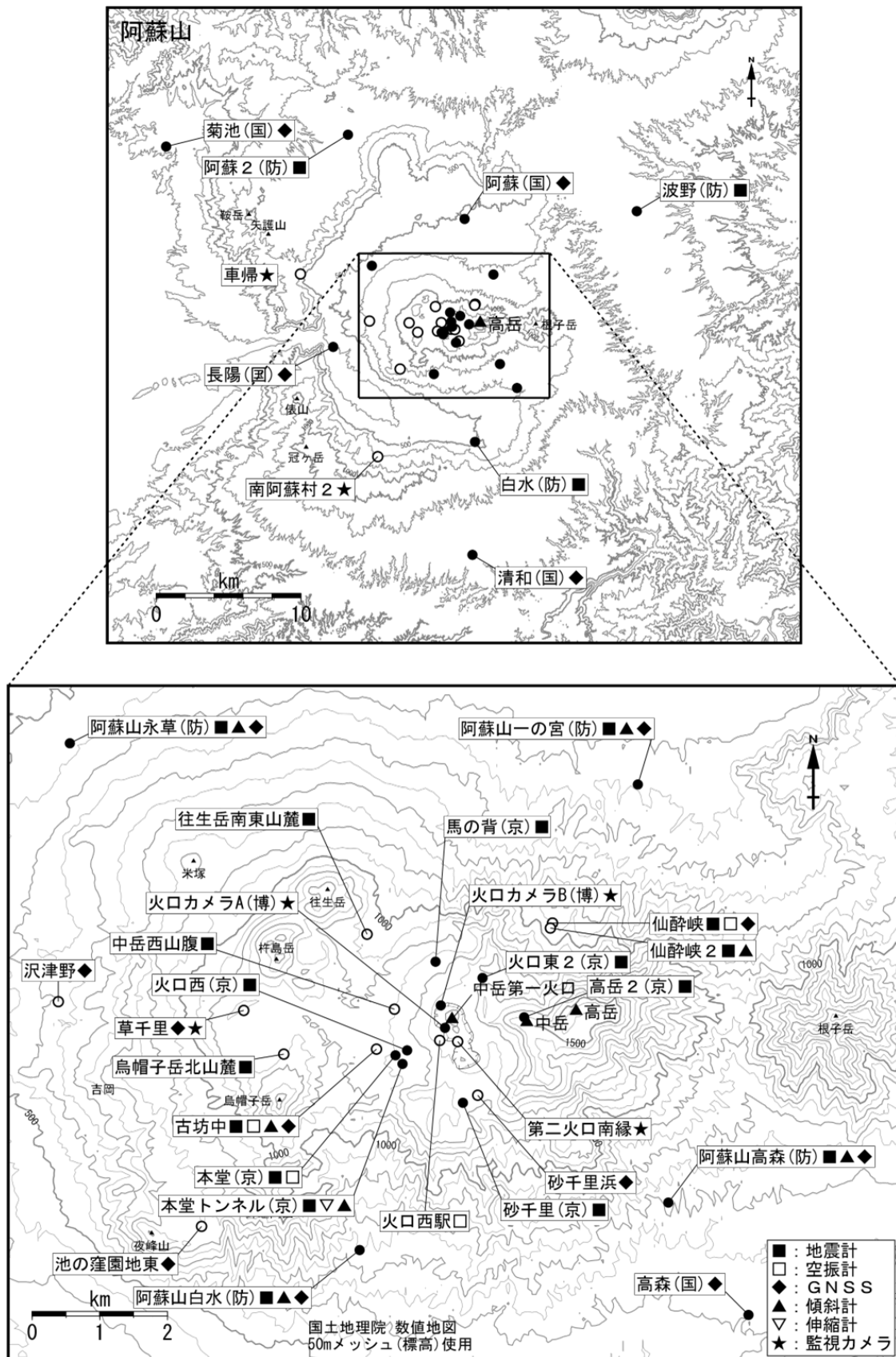


図9 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所、（博）：阿蘇火山博物館、（国）：国土地理院